

平成30年 6月12日現在

機関番号：32682

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07351

研究課題名（和文）中国南北朝時代における非漢族のエスニック・アイデンティティ変容

研究課題名（英文）Transition of the Ethnic Identity of the Non-Chinese in Southern and the Northern Dynasties China

研究代表者

会田 大輔 (aida, daisuke)

明治大学・研究・知財戦略機構・研究推進員

研究者番号：70551844

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：中国の南北朝時代（5～6世紀）、北朝は鮮卑を中心とする非漢人、南朝は漢人が政権を握っていた。しかし、北魏孝文帝の改革（5世紀末）以後、北朝の非漢人は徐々に中国化が進み、彼らのエスニック・アイデンティティ（民族集団に対する帰属意識）も変容した。その結果、7世紀には漢人を標榜する楊氏・李氏による隋・唐帝国が成立し、東アジアに大きな影響を与えるに至った。本研究では、南北朝時代から隋唐時代への変容を解明するために、非漢人のエスニック・アイデンティティ変容の過程を分析した。その結果、北朝後期の多くの鮮卑系官僚が非漢人と漢人の間でアイデンティティが揺れ動き、様々な道を選んでいたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：During the Southern and the Northern Dynasties period in China, the north was ruled mostly by non-Chinese clans such as the Xianbei, and the south, by the Han Chinese. However, after the reformation by the Northern Wei Emperor Xiaowen at the end of 5th century, the non-Chinese in the north were gradually sinicized, which also led to change in their ethnic identity. This resulted in the establishment of Sui-Tang dynasties in the 7th century by the Yang and the Li family who both claimed to be Han Chinese, which made a big impact in east Asia. This study analyzed the stages of ethnic identity transition of the non-Chinese in order to further understand the changes that occurred between the Southern and the Northern dynasties and the Sui-Tang period. As the result, it became clear that for many of the Xianbei bureaucrats during later half of the Northern dynasties, their ethnic identity wavered between non-Chinese and Han Chinese, which led to their choosing diverse paths.

研究分野：中国南北朝隋唐史

キーワード：南北朝 北族 アイデンティティ 墓誌 北周

### 1. 研究開始当初の背景

中国の南北朝時代(5~6世紀)、北朝は遊牧民の鮮卑を中心とする非漢人(以下、北族)、南朝は漢人が政権を握っていた。しかし、北魏孝文帝の改革(5世紀末)以後、北朝では徐々に中国化が進み、北族のエスニック・アイデンティティ(民族集団に対する帰属意識)も変容し、漢人を標榜する人々が登場するようになった。その結果、7世紀には本来北族でありながら、漢人を標榜する楊氏・李氏による隋・唐帝国が成立し、ユーラシア東部に大きな影響を与えるに至った。

しかし、隋・唐の皇帝の父祖は、北朝後期に關中を支配した北族優位の西魏・北周に仕えていた。この西魏・北周から、漢人を標榜する隋・唐がなぜ誕生しえたのかという問題については、未だに十分な解答をえていない。そもそも皇帝が漢人を標榜した北齊のみならず、北族優位であった西魏・北周においても、漢人を標榜する北族が多数あらわれているのである。一体、なぜ北朝後期において北族のエスニック・アイデンティティ変容が起きたのだろうか。本研究では、この問題に着目した。

### 2. 研究の目的

従来、北族のエスニック・アイデンティティ変容の問題については、日本では「胡漢融合」、中国では「漢化」の一言で片づけられていた。そもそも、なぜ北族がいわゆる「胡漢融合」の道を選ばなければならなかったのかという基本的な問題についても等閑視されてきた。

しかし、南北朝時代から隋唐時代への変容過程を明らかにするためには、この問題の解明が欠かせない。そこで本研究では北朝後期を中心に、北族のエスニック・アイデンティティ変容の過程を詳細に分析することを目指した。

なお、民族集団に対する帰属意識を意味する「エスニック・アイデンティティ」という概念を前近代にあてはめることには注意が必要である。しかし、中国では古くから言語・文化などを核として、漢人と遊牧民などの非漢人を分けていた。日本では現時点で前近代に対して「エスニック・アイデンティティ」に替わる言葉が生み出されていない。そのため本研究では、この用語を使用する。

### 3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、主に次の三点の課題の検討を進めた。

一点目はエスニック・アイデンティティ変容の代表例として、北魏分裂後に皇帝に即位した北族に着目して研究を進めた。特に北族優位の北周の第三代皇帝で、華北統一を果たした武帝(宇文邕)と、6世紀半ばに北朝の東魏から南朝の梁に亡命し、南朝を衰退に追い込んだ侯景に焦点をあてた。

二点目は、北魏から東魏北齊・西魏北周を

へて隋・唐に仕えた北族の文献史料・石刻史料(主に墓誌)を調査し、そのエスニック・アイデンティティの変容過程の分析を試みた。

三点目として、もともと先祖は北族でありながら、北朝末・隋代から漢人を標榜し、ユーラシア東部に大帝国を築きあげた唐の太宗に着目し、彼のエスニック・アイデンティティや歴史意識がどのようなものだったのかを検討した。

### 4. 研究成果

(1)北族皇帝のエスニック・アイデンティティについての研究では、大きく分けて三点の成果を得た。

#### ・北周武帝の禁衛改革

北周の武帝は、即位から約12年にわたって宰相の宇文護(武帝の従兄)に実権を握られていた。武帝は572年に宇文護を誅殺して親政を開始すると、宇文護に軍権を握られてしまった北周前半期の政治状況を踏まえ、皇帝直属の禁衛を創出する必要性を感じ、禁衛改革を実施した。その結果、禁衛に宮伯・司武・司衛が置かれ、その下に侍伯・胥附・承御などを設置し、皇帝直属とした。

この侍伯・胥附・承御について、文献・石刻史料から就任者の事例を収集し、分析を加えた。その結果、主な職掌は皇帝の宿衛であり、承御には侍従的側面もあった。おおむね元勳・功臣の子弟が就任していた。また、北周前半期の禁衛官がほぼ北族で占められていたのに対し、これらの禁衛官には漢人が散見された。徐々に北族と漢人の区別が希薄化したことが窺える。侍伯・胥附・承御は侍衛の要素を一部備えた禁衛に位置付けられる。

侍伯・胥附・承御などの禁衛は、北齊侵攻にも従軍して活躍した。また、侍伯・胥附は、武帝の側を離れて別働隊として軍事行動をとることもあった。新設された禁衛は、武帝の手足となって親征を支えていたのである。また、武帝は華北統一戦役の際に、彼らを通して中央軍(二十四軍)の禁衛化を推し進めた可能性がある。

北族優位であった西魏・北周では、鮮卑・漢人双方の復古的政策が断行され、遊牧民由来の制度が存在した。しかし、武帝によって新設された禁衛に、遊牧官制の要素は希薄であった。この点に武帝の西魏以来の復古政策からの脱却志向が窺える。

この研究成果は、東西学術研究所第14回研究例会非典籍出土資料研究班で報告した後、論文化を進め、中国で刊行されている『中国中古史研究』に掲載が決まった。

#### ・北周武帝の華北統一

続いて577年の武帝の華北統一の過程について、武帝親政期の政治・外交、周辺勢力の動向を軸に検討を加えた。

武帝が北齊を短期間で滅ぼすことに成功

した背景には、武帝による皇帝専権体制の構築や富国強兵政策、北齊の政治的混乱などがあげられる。ただし北齊崩壊の直接の引き金となったのは、晋州の戦いにおける武帝と北齊後主のふるまいの違いにあった。両者とも軍事経験に乏しかったが、武帝が戦う皇帝として最前線に立ち続けたのに対し、後主は戦場から逃亡してしまった。その結果、後主に失望した北齊の将帥（主に北族）の降伏が相継ぎ、北齊は瞬く間に崩壊したのである。

西魏では遊牧的要素の濃い政策が展開され、北周皇帝（宇文氏）も漢人を標榜しなかった。武帝自身は中華皇帝たらんと努めていたが、鮮卑を中心とする北族の元勳・功臣の影響力は強く、鮮卑の気風も残っていた。そのため武帝は彼らの支持を得るために、戦う鮮卑皇帝として振る舞わざるを得なかったのである。

北齊侵攻の流れを見ると、武帝の戦術眼にはやや疑問符がつく。諸将も軍事経験の足りない武帝を信用していなかった。しかし、武帝は失敗を重ねつつも、積極的に最前線で戦い続け、短期間で北齊を崩壊させるに至った。武帝は、中華皇帝としてではなく、戦う鮮卑皇帝として振る舞ったからこそ、華北統一を果たせたのである。この点に武帝のエスニック・アイデンティティの複雑さが窺える。

この研究成果は論文化し、窪添慶文編『アジア遊学 213 魏晉南北朝史のいま』に掲載された。

#### 侯景の乱と梁漢革命

侯景は、6世紀半ばに皇帝を称した北族でありながら、本格的な検討がなされていない人物である。六鎮出身の侯景は、北朝（東魏）から南朝（梁）に亡命した後、南朝で反乱を起こして実権を掌握し、梁を篡奪して「漢」を建国した。侯景の乱の結果、南朝は衰退に追い込まれた。しかし、これまで侯景自身の目的や国家像などについては検討されていない。彼が建国した「漢」は、わずか半年足らずで滅んでしまったため、これまで等閑視されてきた。しかし、侯景が漢人を称した理由や、侯景の目指した国家像を分析することで、北族のエスニック・アイデンティティ変容の一端を解明できると考えられる。

そこで本研究では、まず日本・中国における侯景に関する研究動向を整理した。日本では侯景の乱に関する研究は少なく、経緯・原因などについて論じられているのみである。中国では、1980年代以降、侯景の乱に関する研究論文が多く発表されているが、侯景の乱の原因・経緯・南北朝に及ぼした影響などについて論ずるのみであった。

次に侯景の乱に関する史料に検討を加え、侯景を正当化する史書は編纂されていないこと、侯景を打倒した梁の元帝の立場に立つ史書が多いこと、梁の元帝に批判的な史書も存在することを指摘した。

さらに侯景の出自について検討を加えた。

先行研究において侯景は、南朝側の史料に基づいて「羯」とされていたが、文献史料を丹念に見直すと「羯」に断定できないことがわかった。また、南朝において漢人を自称し、「漢」を建国する侯景は、もともと懐朔鎮出身の北族（正確な種族名は不明）で、小勢力を率いる家柄であったと考えられる。侯景の乱と梁漢革命については、現在、さらに検討を進めている。

（2）北朝後期～隋唐における北族のエスニック・アイデンティティ変容については、文献・石刻史料から事例の蒐集に努めた。検討すべき史料が膨大で、北族のエスニック・アイデンティティ変容の全体像の解明には至らなかったが、以下の成果を得た。

西魏・北周の元勳であった侯莫陳崇一族の子孫は、北朝後期・隋代の石刻史料では北族出身であることを明示していたが、唐初の墓誌では前漢の皇帝の子孫であると称するようになった。ただし、始祖については墓誌によって異なり、始祖伝説が固まっていなかった様子が窺える。さらに唐代後期の8世紀末以後、侯莫陳氏の中のある系統で、徐々に正史（『晋書』・『周書』など）を利用して、西晋末に活躍した劉琨（漢人）の親族（劉洪）が北方に移住して侯莫陳氏が生まれたという先祖伝説を創出し、鮮卑であった事実の忘却を図ったことが明らかになった。これについては、現在、さらに検討を進めている。

（3）唐の太宗の歴史意識については、次の様な成果を得た。

唐の太宗は、皇太子の兄李建成を玄武門の変で殺害した後、皇帝に即位した。そのため、急遽、帝王としての知識を習得しなければならなかった。そこで南朝系官僚の虞世南に中国通史の編纂を命じた。虞世南は、鑑誡の意を込めた『帝王略論』を編纂した。

そこで『帝王略論』が太宗に与えた影響について検討した。『貞観政要』などに見える太宗の歴史談義と『帝王略論』を比較した結果、太宗は貞観10年（636）頃まで『帝王略論』の影響を受けていたことが判明した。ただし、太宗は『帝王略論』の評価を鵝呑みにするのではなく、『帝王略論』をたたき台として歴史評価を行った。また、徐々に自身の経験・知識が豊富になるにつれて、『帝王略論』の影響は希薄化した。

『帝王略論』は、南朝系官僚の虞世南が編纂したため、北朝の皇帝に対して厳しい評価を下している。しかし、唐は北魏・北周・隋を正統王朝としており、太宗は『帝王略論』の北朝評価に違和感を覚えていた節がある。太宗は既に祖父の代には漢人を標榜していたと考えられ、北族としての意識は希薄だったと思われるが、南朝系官僚の歴史認識に同調したわけではないのである。

この研究成果は、明治大学アジア史料学研究所 2017年度研究シンポジウム「王と書籍」

において報告し、現在、論文化を進めている。  
また、『帝王略論』の分析を進めるため、その校注を作成し、『明大アジア史論集』第 21 号に掲載した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

会田大輔, 「『帝王略論』巻二校注稿」, 『明大アジア史論集』第 21 号, 査読無し, 2017 年 3 月, pp.1-26

会田大輔, 「北周武帝の華北統一」, 窪添慶文編『アジア遊学 213 魏晋南北朝史のいま』勉誠出版, 査読無し, 2017 年 8 月, pp.59-69

会田大輔, 「北周武帝的禁衛改革 以侍伯・胥附・承御を中心」, 『中国中古史研究』6, 査読有り, 2018 年 8 月刊行予定(本来、2017 年度中に刊行予定であったが、中国の出版事情により刊行が遅延している。)

〔学会発表〕(計 2 件)

会田大輔, 「石刻史料からみた北周武帝の禁衛改革」, 口頭発表, 東西学術研究所第 14 回研究例会非典籍出土資料研究班(於大阪府・関西大学), 2017 年 1 月 28 日

会田大輔, 「唐の太宗と『帝王略論』」, 口頭発表, 明治大学アジア史料学研究所 2017 年度研究シンポジウム「王と書籍」(於東京都・明治大学), 2018 年 3 月 10 日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

会田大輔, 「書評: 大淵貴之『唐代勅撰類書初探』」, 『唐代史研究』第 19 号, 2016 年 8 月, pp.214-221

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

会田 大輔 (AIDA DAISKE)

明治大学・研究知財戦略機構・客員研究員

研究者番号: 70551844

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号:

##### (4) 研究協力者

( )